

高齢者グループの共食コミュニケーションにおける大皿料理の役割 ～銘々膳と共同膳による事例検討～

Role of Shared Platte in Elderly Co-eating Communication ～ A comparison of communicative behaviors between individual and shared plates use ~

徳永 弘子[†], 花井 俊孝[†], 木村 敦[‡], 武川 直樹[†]
Hiroko Tokunaga, Toshitaka Hanai, Atsushi Kimura, Naoki Mukawa

[†]東京電機大学, [‡]日本大学

Tokyo Denki University, Nihon University
17kz007@ms.dendai.ac.jp

概要

本研究は多人数による食事場면을対象に, 食事形式が人と人のコミュニケーション行動に及ぼす影響について明らかにする。65才以上の男女6人1組, 計4組に銘々膳, 共同膳形式による食事をしてもらい, 食事中の様子を映像に収録した。提供された料理は, 参加者らに話題を提供し, コミュニケーションツールになり得るとの仮説の下, 各食事形式の料理に関する発話量から, 食事形式ごとでコミュニケーションツールとしての役割が変化するかについて明らかにする。分析として, (1) 提供された料理に関する話題の時間と食事形式の関係, (2) 共同膳からの取り分け行為と料理の話題の時間長の関係を事例的に検討した。その結果, 提供される食事形式によって目の前の料理が話題に上がる頻度が異なること, 共同膳がコミュニケーションツールとしての役割を担っており, 参加者の共有物としての存在がコミュニケーションの促進に寄与する可能性が示唆された。

キーワード: 食事形式, 料理の話題, 多人数コミュニケーション

1. はじめに

本研究は高齢者の心身の健康支援として, 食事形式が人と人のコミュニケーションにもたらす効果の解明を目指している。近年, 高齢者によるファミリーレストランの利用が増えている。60歳以上のシニア約500人を対象とした調査では, ファミレスは同年代の友人知人と利用することが多く, コミュニケーションの場であるという意識が強い¹。自治体においても, 高齢者の社会的孤立や閉じこもりを防ぐため, 食事会を催し交流の場を用意する活動が行われている(例えば東京都北区²など)。一方, 最近では, 新型コロナウイルス感染症(COVID-19)対策のため, 高齢者施設においては

通所による食事会の制限が余儀なくされている。それでも, 厚生労働省は高齢者においては孤独を防ぎ, 心身の健康を保つために人との交流が大切であるとし, 閉じこもりへの注意喚起を行っている³。そうした現状を踏まえると, 高齢社会である我が国にとって, 今後ますます高齢者の仲間づくりや, 情報交換の機会を提供する場としての食事の役割は重要である。

レストランで提供される食事形式には, 一人一人に配膳される形式や, 中華料理のように大皿から個々に取り分ける形式がある。懇親会の場合には, 場所を移動しながら食事と会話を楽しむ立食形式などがある。食事形式はメニューの内容によっても異なり, 特に高齢者に好まれる和食は日本文化の名残で, 銘々膳の形式で提供されることが多い。この形式は, 江戸時代中期から大正時代まで用いられてきた箱膳を継承した形式である。当時の箱膳の役割は, 家長を頂点とした「イエ制度」において, 長幼の別の原理を持つ座順を整えることに機能していた [1]。その後ちゃぶ台の時代を経て高度経済成長期後半からダイニングテーブルの時代になると, 一皿にたくさんのお菜を盛って自由に好きなだけ食べられる大皿料理が日常化し [2], 食事の場は家族のだんらんの役割を果たすようになったという [1]。食事の形式は, それぞれに機能を持ち, 時代の要請と共に変化してきた。

現代は, 食事における形式の本来の役割は形骸化し, 食事は交流を楽しむ場としての機能を担う傾向がある。しかし銘々膳や共同膳などの食事形式が, 食事を交流の場として利用する人々のコミュニケーション行動に及ぼす影響は明らかでない。

1 ジャストリサーチ株式会社調べ

https://www.lisalisa50.com/research20131125_9.html

2 東京都北区ホームページ

<https://www.city.kita.tokyo.jp/choju/kenko/koshsha/kenkoz>

ukuri/annai.html

3 厚生労働省ホームページ

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/yobou/index_00013.html

そこで筆者らは、食事形式と人のコミュニケーション行動の関係を明らかにするため、高齢者ら4つのグループに銘々膳と共同膳で提供した食事の映像を撮影し、分析を行った。食事開始5分間の映像を観察したところ、食事を共同膳形式で提供されたグループは、膳の配置や取り分け方、皿を回す順番決めなど、食卓の環境づくりをする行動が認められた。これは、共同膳が皆の共有物であるという特性が、参加者らの行動に影響し、さらに食事開始前のアイスブレイクに機能していると考えられた[3]。さらに多人数会話においては、人数が増えるにつれ発言権を得にくい参加者が出現する。しかし、共同膳においては目の前の料理を話題に、発言権を得ていなかった人が会話を開始していたり、他者から料理の取り分けを促されることによって、それまで聞き手に徹していた人が発言の機会を得たりする事例が観察された[4]。このように、これまでの分析により①食事は人のコミュニケーションに影響を及ぼす。②共同膳が参加者の共有物であるという特性によって、しばしば料理の話題がコミュニケーションに介入することが明らかになっている。

食事において共有物の分配が人の心の分かち合いにも関係することは文化人類学者の石毛によって提唱されており[1]、さらに近年、この主張を実験的に明らかにした報告がある。Woolleyらは、大学生ら2人組の実験参加者に共有プレートからの取り分けと個別の皿でスナック菓子を提供し、交渉シミュレーションや囚人のジレンマの課題を用いて検討した(n=1476)。その結果、共有プレート条件の参加者の方が個別プレート条件の参加者より協力行動が見られ、質問紙調査においても協調性の増加、競争力の低下が示された。共有プレートは、二者間で摂取量を調整し、公平に分配されるように協力が必要であり、この特性が実験参加者に協調性をもたらし、それは初対面であっても友人関係であっても、同様の効果があるという[5]。

そこで本研究では以上の先行研究を踏まえ、より日常生活の交流に近い場面において、食事形式が多人数会話のコミュニケーションにもたらす効果の検討を行う。特に共同膳における取り分け行動にフォーカスし、料理の話題量を評価指標に設定した分析を行う。

2. 共食シーンの映像

分析する食事映像データは[3][4]と同様である。具体的には、撮影は和食レストランの個室において2018年

8月から9月の期間、8回行われた。実験協力者は地域のシルバー人材センターの公募により集まってもらった。以下に、詳細を記す。

2.1 実験協力者

65~80才(平均年齢72.5才SD=4.4)の男女24人(男性11人、女性13人)である。協力者らは地域のシルバー人材センターにおいて仕事をしたりサークル活動に参加したりしている。6人それぞれの間柄は、一緒に仕事をしている、顔は見たことがある、初対面、など様々であった。ただし、4グループのうち今回同席する6人が一緒に食事をしたことがあるグループはなかった。また、実験者側からグループ内の男女比、親密度の統制は行わなかった。

2.2 食事形式とメニュー

食事はある和食レストランに協力いただき実施した。食事形式は銘々膳形式と共同膳形式であり、食事のメニューは、刺身ばらチラシ・あさりの味噌汁・てんぷらの盛り合わせ・ローストビーフサラダ・彩り野菜のディップ・デザート・お茶(温/冷)である。食事形式に関わらず食事の内容は同じである。



(a) 銘々膳形式による食事



(b) 共同膳形式による食事

図1 Aグループの共食会話のシーン

食事は1グループにつき銘々膳形式と共同膳形式の2回行い、1回目と2回目は約3週間の期間をあけた。実験においては2つの食事形式の間に順番効果が影響しないよう、カウンターバランスをとった。各条件ともに食事は11時30分に開始し昼食を想定した。Aグループが銘々膳形式、共同膳形式により食事をしている様子を図1に示す。

2.3 映像収録

共食中の様子は映像に記録した。カメラは各協力者の正面撮影用と俯瞰用にGoPro製CHDCB501を使用した。またテーブル中央にコダック製SP3604Kを設置し、全方位を撮影した。映像収録環境を図2に示す。

協力者の音声録音はICレコーダ（ソニー製ICDPX470FBC）を用いた。ICレコーダは図3のようにネックフォルダに収納した。

映像の録画は、実験者の退室と共に開始された。食事の様子がわかるよう俯瞰用のカメラとタブレット端末をWiFiで接続し、実験者は店の外からモニタリングした。実験者は食事が終了したと判断されたところで入室し、撮影を終えた。撮影時間は表1の通りであった。

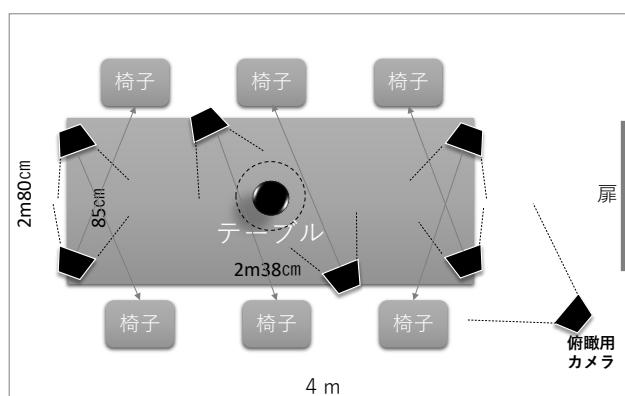


図2 共食会話の映像収録環境

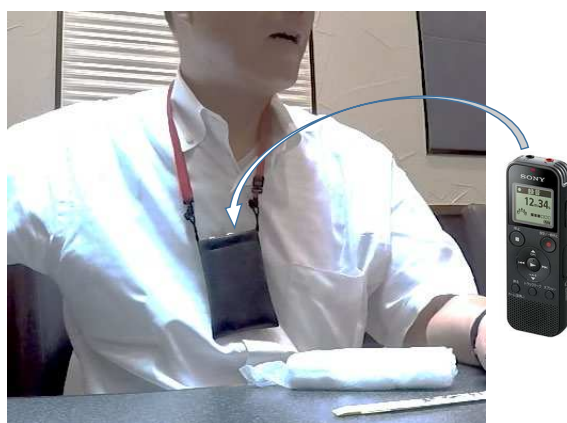


図3 ICレコーダ収納用ネックフォルダ

表1 各グループにおける食事形式ごとの収録時間

グループ	銘々膳	共同膳
A	75分 (1)	75分 (2)
B	75分 (2)	78分 (1)
C	66分 (1)	70分 (2)
D	60分 (2)	58分 (1)

()内は実施順

なお、本実験は東京電機大学ヒト生命倫理審査委員会が定めるガイドラインに沿って行い、協力者、協力店の配膳担当者にはビデオカメラで収録した映像や静止画を学会誌などに掲載することへの同意を得た。

3. 各グループの特徴と会話内容

本章では、各グループの男女比、関係性、実際に話された会話のテーマについてその概略を述べる。

Aグループ

68才から77才の男性1名、女性5名からなる。この6人はシルバー人材センターにおいて同じ仕事をしてきた経験がある。会話全体を俯瞰してみると、女性のうちの2人が話題提供をする場面が多く、シルバー人材センターでの出来事や、自宅での日常生活、体調や病院の話が中心であった。食事の量が多かったとの感想で、映像からも他のグループに比べ多めの残飯が確認された。

Bグループ

67才から78才の女性6人のグループである。6人はシルバー人材センターにおけるいくつかの仕事で過去に数回、顔を合わせたことがあるが常に同じ職場で共にしているわけではない。全員女性ということで、提供された食事の味や作り方、またそこから派生する家庭での調理の仕方などの話で盛り上がる場面が多く観察された。話が盛り上がり、銘々膳形式、共同膳形式共に最も食事時間が長かった。

Cグループ

65才から78才の男性4人と女性2人のグループである。事前の関係性において4組のグループのうち、最も親密度が低いグループであった。よって共通の話題に乏しく、沈黙する場面が多く観察された。ある1人が話題提供するとしばらくその1人が話し続け、他の5人が聞き役にまわる会話パターンが多かった。

Dグループ

67才から80才の男性6人のグループである。同一

の職場で顔を合わせることが多いとのことで、和気あいあいとした雰囲気の中で会話が進んでいた。最近のニュースやテレビ番組の話や、自分たちの若い頃の経験と現在の若者との違いなどが話題に上っていた。食べる速度が速く、食事時間は銘々膳形式、共同膳形式共に最も短かった。

4. 結果

各グループの食事時の発話を書き起こし、そのうち本稿では各グループともに、最初の一人が摂食を開始した地点から 30 分を分析の対象とした。

はじめに、各参加者の発話時間を計測した。発話時間の長さは、話し好きでトピックをつねに主導するタイプ、聞き手として会話に参加することが多いタイプなど、個人のキャラクタに依存していた。またその場のトピックで中心的役割を長時間担うなど、話題にも影響しており、発話時間の長さや食事形式の間に関係は見られなかった。

つぎに、多人数会話において提供する食事形式によって、料理がコミュニケーションツールとしてどのように寄与するかについて分析した。具体的には 30 分間の話題を、目の前の料理、料理から派生、料理以外に分類し頻度を算出した。さらに共同膳においては大皿からの取り分け行為が伴うため、取り分け行為と料理の話題の関連について検討した。

4.1 料理の話題の出現頻度

はじめに提供された料理の話題の出現頻度を算出した。結果を図 4 に示す。図 4 の左に銘々膳、右に共同膳の結果を配置した。例えば「この天ぷらはカラッとあがっておいしい」は目の前の『料理の話題』であり（濃いオレンジ部分）、「糖尿の気があるからカロリーを控えて普段天ぷらはあまり食べない」は『料理から派生』した話題に分類した（薄いオレンジ部分）。さらに「糖尿で病院に行ったら主治医が変わってしまった」といったその先に展開された話題や、全く異なる話題は『料理以外』とした（クリーム色部分）。なお無音が 3 秒以上続いた場合は沈黙区間として別途カウントした（グレー部分）。

図 4 から、グループ 1, 2, 3 においては共同膳で料理の話題が多く、さらにグループ 1, 2 においては料理から派生した話題が話されていたことが示された。一方でグループ 4 では食事形式に寄らず 90% 以上は料理以外の話題であった。次に、共同膳の特有の行

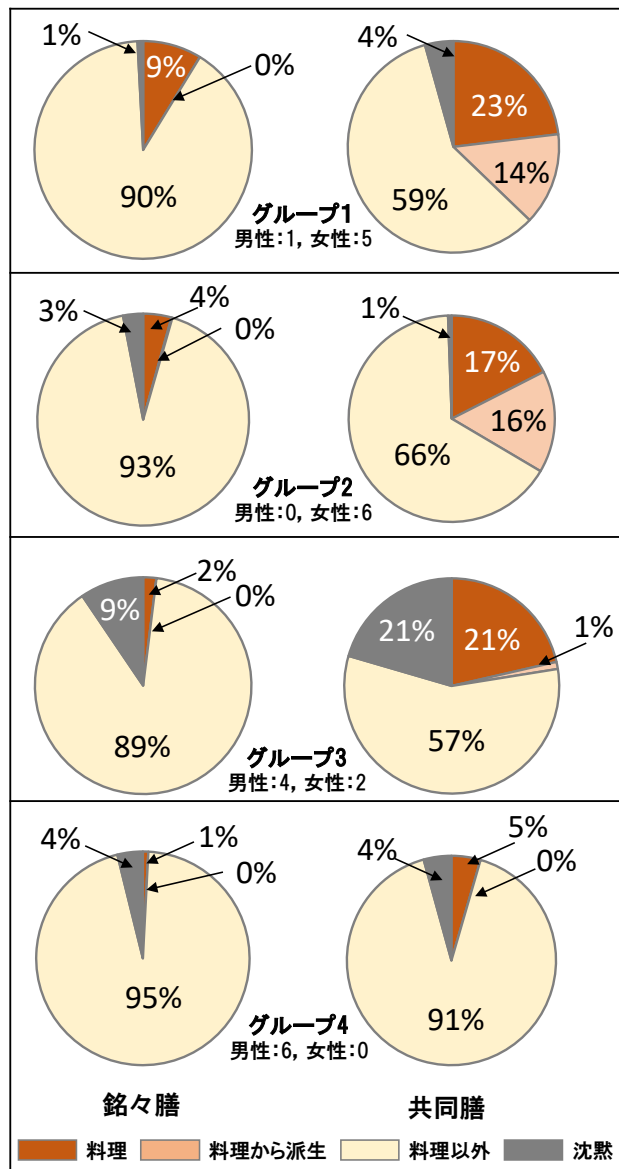


図 4 料理の話題の出現頻度

動である取り分け行為が、料理の話題の出現とどのように関わるかについて調べる。

4.2 大皿からの取り分け行為と話題の関係

図 5 に各グループのトピックの流れと取り分け状況を示す。上段に示すトピックの流れは図 4 と同じデータを時系列上に並べなおしたものである。下段の取り分け行為について、濃い緑は取り分けにより他者と皿の受渡しなどのやりとりが発生した区間を、薄い緑は、自分の皿に取り分けたのみでやりとりが発生しなかった区間を、薄いグレーは取り分けをしない区間を示している。これにより、時系列上、濃いオレンジと濃い緑が同時に生起している箇所は、取り分けながら料理の話をしていることが示されている。

図 5 においては、グループ 1, 2 は取り分け時に皿を介して言葉のやりとりがあり、それをきっかけに料理

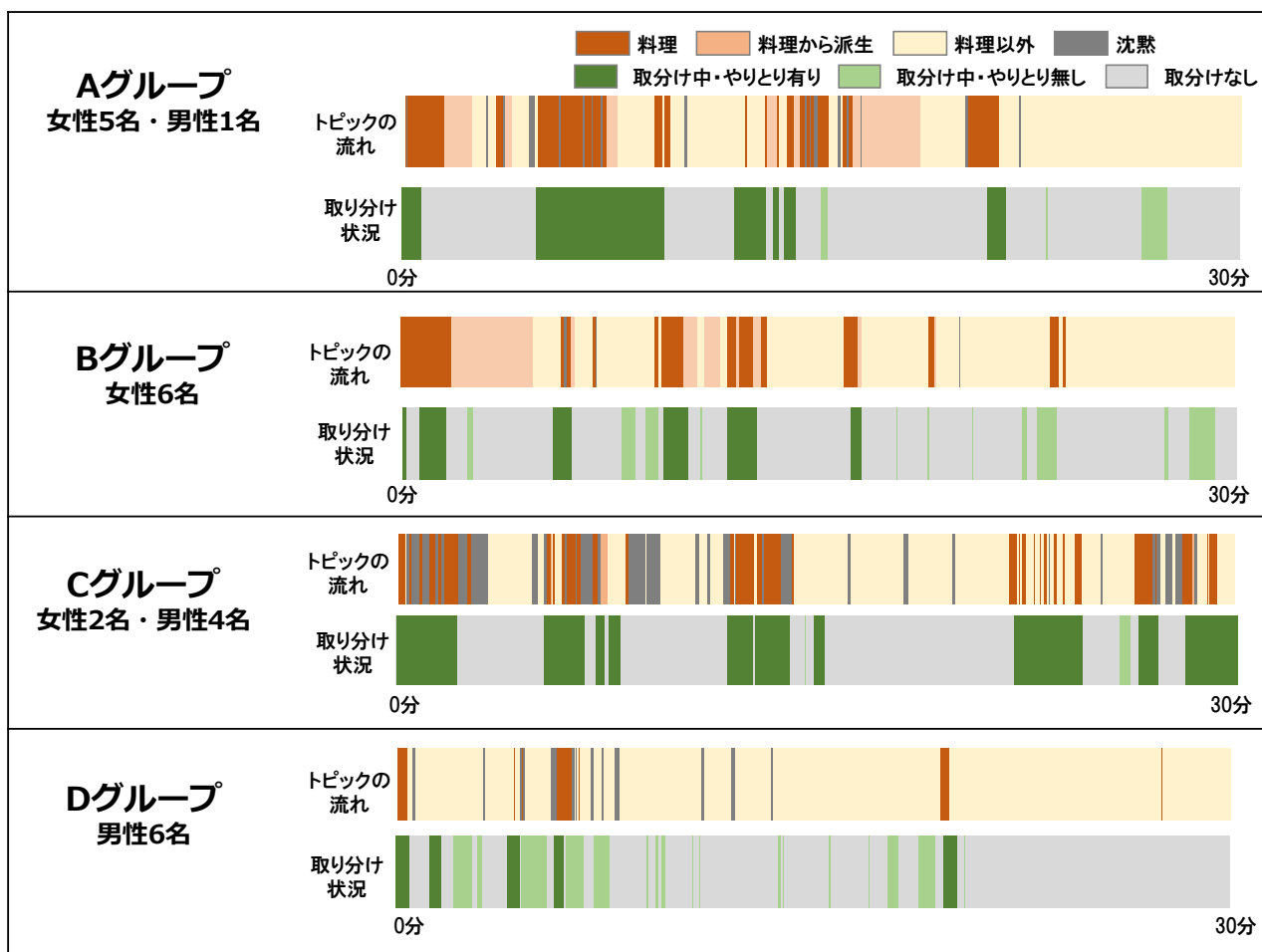


図5 共同膳形式におけるグループごとのトピックの流れと取り分け状況

の話題が話され、その後も料理から派生した話題に発展していることが示されている。具体的にはサラダを取り分ける際、ドレッシングをどれくらいかけるかといった話題から、家でドレッシングを手作りするときに配合する材料の話に発展したり、ちらし寿司の彩に添えられた栗の水煮を取る際、栗を剥くと手が汚れるし痛くなるという発言があり、さらに栗剥き専用の器具が売ってるなどといった情報交換がなされていた。

グループ3は取り分けるごとに、「お替わりはいかがですか」「こっちにまだ野菜が残っています」「まだとっていない方はいないですか」などといった、お替りの促しがなされた。会話においては、グループ3は気まずい沈黙の発生が最も多く、大皿から取り分けても料理の話題から関連するトピックに移ることはなかった。

グループ4は取り分け中に他者とやりとりが生じることは少なく、前半に皿を回す順番や、調味料の受渡しに関わる話題が見られただけであった。話題はシルバー人材として派遣されている仕事先に関わるものが多く、そのほかニュースや近所での出来事が話されてい

た。会話は盛り上がりしており、共同膳からの取り分けの際は、自分の分のみを皿に取り分けていた。

5. 考察

図4において、グループ1、2は共同膳において料理の話題、さらに料理から派生する話題が多かった。グループ1、2は女性の多いグループであり、取り分けたり皿をまわしたりしながら料理の話題が上がり、それをきっかけにさらに話題が展開されていた。女性にとって、メニューのバリエーションや作り方、味付けといった情報は、家族の体調管理や自身の健康維持のために感心の高いトピックであると考えられた。よって、女性同士の会話場において、共同膳からの取り分け行為とコミュニケーションの活性には関連があったものと考えられる。

グループ3は共同膳において料理の話題が多く、それは取り分け時に生じていた。このグループは初対面同志が多く、全員が共通する話題に乏しかった。会話自体も盛り上がりには欠け、図5において、濃いグレーが

頻出している通り、各所で長い沈黙が生じていた。一方で、取り分け時には料理に関する会話が交換されていたことから、取り分け行為が、沈黙解消に寄与した可能性が考えられた。さらに、取り分けながら他者の皿を気にしたり、お替りを促したりといった行為が確認された。Woolleyらが、共有プレートは公平に分配されるように、摂取量が調整され、それは参加者らの協力で達成されると主張しているが[5]、多人数の場において取り分け行為の際、必要とされる協調性が最大限に発揮される可能性がある。特にグループ3においては、親密性の低い関係が、取り分けの公平性を維持するための協調行動をより喚起させた可能性が考えられる。

グループ4は食事形式によらず料理の話題少なかった。このグループは男性のみの知り合い同士のグループで、興味関心は社会的、政治的な話題であった。食事シーンを観察したところ、共同膳からの取り分けの場合にも料理の話題が上がる場面は少なかった。むしろ、自分の皿に素早く取り分け、その行為が会話の妨げにならないよう気遣っている場面が観察された。食事後に実施したインタビューでは、話しているときに大皿に手を伸ばすのは憚られるので、食事は銘々膳の方が気楽でよい、との感想が述べられた。

今回の4組のグループの事例を総合的に解釈すると、

1. 共同膳による会話は銘々膳よりも料理の話題が多く、理由として大皿からの取り分け行為が関わっていることが示唆された。

2. 共同膳からの取り分けは、料理に関心がある参加者らに話題をもたらし、その話題はさらに展開され、情報交換される。また親密度の低い間柄のグループでは沈黙時の話題提供に寄与するものと考えられた。

3. すでに共通の話題を持つ間柄のグループにおいては会話の進行が重視され、取り分け行為は個人的行為として最小化される場合がある。

6. まとめ

今回の事例検討により、同じメニューであっても提供する食事形式によって目の前の料理が話題に上がる頻度が異なることが一部のデータで確認された。その場合には共同膳がコミュニケーションツールとしての役割を担っており、参加者の共有物としての存在がコミュニケーションの促進に寄与したのと考えられた。しかし、今回共同膳によるコミュニケーションの役割は参加者の性別や関係性により異なることも示された。そのため今後は、さらに発話内容を精査し、また、視線配布や皿の受渡しの様子を微視的に観察し、高齢者のコミュニケーション支援に向け、食事形態が果たす役割を明らかにする。

謝辞

食事実験実施にあたり、公益社団法人白井市シルバー人材センター様、はな膳千葉ニュータウン店様には多大なるご支援を賜りました。ここに記し、深謝の意を表します。

本研究は、科学研究費助成事業基盤研究(C)18K0222、アサヒビール学術振興財団研究助成金による援助を受けた。

文献

- [1] 石毛直道, (2005) “食卓文明論—チャブ台はどこに消えた”, 中公叢書
- [2] 熊倉功夫, (2015) “和食の歴史”, モダンメディア, Vol.61, No.9, pp.2-6.
- [3] 徳永弘子, 木村敦, 武川直樹, (2018) “高齢者の共食コミュニケーション研究に向けたデータセットの構築”, 電子情報通信学会技報, vol. 118, no. 278, pp. 25-30
- [4] 徳永弘子, 花井俊孝, 木村敦, 武川直樹, (2019), “高齢者らの共食会話における会話の分裂と食事行為の関係分析”, 電子情報通信学会技報, vol. 119, no. 252, pp. 29-34
- [5] Kaitlin Woolley & Ayelet Fishbach, (2019) “Shared Plates, Shared Minds: Consuming From a Shared Plate Promotes Cooperation”, Psychological Science, Vol.30, No.4, pp.541-552